
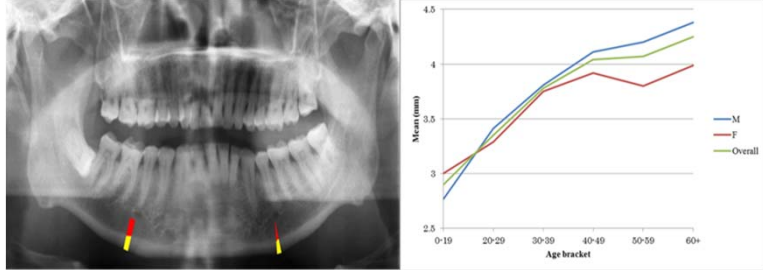


■研究プロジェクト名	
遠隔医療システムを活用したアジア基盤型EBM研究の構築	
【研究の特色・ポイント】	
<ul style="list-style-type: none"> ●遠隔医療は、通信技術を活用した専門医不足や医療機関の偏在等の問題解決に有効なシステムです。 ●東南アジアのラオス人民民主共和国(ラオス)において遠隔医療システムを活用して健康・疾病情報を収集します ●研究情報から健康・疾病のデータ・ベースを構築して、さまざまな病気の診断方法を発達させます。 	
【研究の背景】	
今日の医療においては、患者さんの診療のデータを蓄積して病気の診断の正確性や治療の効果を明らかにする臨床研究が重視されています。グローバル化時代を迎えて、経済的発展途上にあるアジアやアフリカの国々では、国民のための保健医療サービス向上が課題となっており、臨床研究の発展が求められています。そこで、日本大学は東南アジア地域の保健医療向上を支援するため、臨床研究分野の共同プロジェクトをラオス国の大学とともに始動しました。	
【研究成果の概要】	
研究期間	平成 24 ~ 26 年度
研究費総交付額	27,458,000 円
<p>・ラオスにおける小児の罹患する病気の種類や診断と治療方法の情報を集めることができました。日本でも、近年にならない東南アジア地域に固有であると思われた疾患に感染した事例が出てきています。日本の医療関係者にとって、東南アジア地域の医師から医療情報を提供して、かかる疾病の流行に備えることが求められています。今回のプロジェクト活動を通じて日本の医師が医療活動を行うのに必要な知識を蓄積する協力体制が作られました。</p> <p>・高齢者に多い骨粗鬆症(こつそしょうしょう)は、骨の密度が低くなり骨折の原因となっています。この病気の原因のひとつとして乳幼児期からの栄養状態の影響も考えられています。したがって乳幼児期からの骨密度を測定してライフステージを通じて骨の健康を管理に取組む基準値が必要となります。本研究では、歯科のレントゲン画像から顎骨の厚さを測定する技術を使い、ラオスの人々の健康に資する骨密度データを作成しました。このデータをもとに、日本とラオスとで子供たちの健康管理の指標を検討することができます。</p> <p>・医学や歯学分野では、レントゲン画像は、病気の診断に重要な情報源です。ただ、レントゲン診断には、国や地域において技術格差があることが懸念されています。その理由として国や地域によっては、経済状況から診断機器が医学・歯学教育の現場に設置されていないことがあります。そこで、日本とラオスの研究グループでは、レントゲン画像診断の技術能力を相互でチェックする研究活動を実施しました。その結果、日本とラオスとでは、歯科医師の診断に技術差がないことを確認しました。今後、グローバル化に伴い、患者さんが国家間を移動しても安心安全な医療が受けられる基盤形成になる研究成果が得られました。</p> <p>・小児のう蝕(ムシバ)は、歯科だけの疾病だと思われています。ところが、乳幼児期からのムシバが多いことは、子供の発育に深刻な影響があることが指摘されています。本プロジェクトでは、家庭環境や食事調査のデータ収集を行い、ラオスにおける子供の発育とう蝕発生との関係が明らかにありました。今後、予防対策に役立つ研究情報を現地で提供します。</p>	
	
	
図1 プロジェクト概念図	図2 遠隔画像診断による下顎骨の計測と
【研究成果の意義・効果】	
<ul style="list-style-type: none"> ・本研究プロジェクトでは、ラオスのヘルスサイエンス大学と日本大学間に遠隔医療システムを導入することにより、日本と東南アジアで、さまざまな保健医療に関するデータ・ベースを構築しました。 ・本研究プロジェクトを通じて、日本と東南アジア地域における健康情報を共有する国際的な研究連携モデルが構築されました。 	